HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	三巻本『枕草子』不審本文考（二）
Author(s)	後藤，康文
Citation	北海道大学文学研究科紀要，156，1（右）-21（右）
Issue Date	2019-01-11
DOI	https://doi.org/10.14943/bgsl.156.r1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72453
Type	departmental bulletin paper
File Information	156_04_goto.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/bgsl.156.r1

三巻本『枕草子』不審本文考（二）

後藤康文

五

【本文】「説経の講師は」の段

さればとて、はじめつ方ばかり、ありきする人はなかりき。たまさかには、壺装束などして、なまめき化粧じてこそはあめりしか、それに物詣でなどをぞせし。説経などには、ことにおほく聞えざりき。このごろ、そのをりさし出でけむ人、命長くて見ましかば、いかばかりそしり誹謗せまし。

（第三十一段・七五頁一二行～七六頁二行）

【三巻本諸注の解釈】

×はじめつ方ばかり歩きする人はなかりき。／▼歩きする人　車に乗らず徒歩の人。／說教がさかんになりだした當時は、徒歩で聴聞にくるような階級の人はなかつたものだ。（『評釈』本文／頭註／通釋）

×はじめつかたは、かちありきする人はなかりき。／以前は徒歩で出かける婦人などなかった。三巻本「はじめつかたばかり」とあるが、「り」は「ち」の誤りと認め、能因本に従っておく。（『大系』本文／頭注）

×はじめつかたは、かちありきする人はなかりき。／以前はそんなに徒歩で歩きまわる女はなかつた。（『全講』本文／文意）

×はじめつかたばかりありきする人はなかりき。／はじめのころは、女性がうろうろ出あるくことはなかった。／「はじめつかた」は女性が説経聴聞に参加しはじめたころは。「ありきする」は徒歩で行くことで、外出してうろつく。（『旺文社文庫』本文／現代語訳／脚注）

×はじめつ方は、かちありきする人はなかりき。／以前は、徒歩で出かける人はなかった。／三巻本「かりありき」。能因本により訂す。徒歩で出かける人。（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注）

×はじめつかたばかり、ありきする人は、なかりき。／（私が説経に凝っていた）初め頃ほど、よく出歩く女性は、（他には）見なかった。／つまり、これは、清少納言が説経聴聞に凝り出した当初ほど、当時は、女性で説経聴聞に出かける人は少なかったということを言っているのである。その聴聞熱心であった清少納言が、女性の説経聴聞が普及した近頃、とんと不熱心になったことを、当時、熱心すぎると非難していた人が、今も生き永らえていて見ることがあったら、以前とは反対にどんなにか悪くいうだろうという、（中略）末尾と対応しているのである。

これは、文脈的規準及び論理的規準・個性的規準による判断というべきであろう。

（『解環』本文／口訳／問題点）

×はじめつかたばかり歩きする人はなかりき。／あちこちの説経八講を、初日だけのぞく人は以前は見なかった。

能本「このさうしなどいできはじめつかたは、かちありきする人」。（『和泉古典叢書』本文／頭注）

×はじめつかたは、かちありきする人はなかりき。／底本「かりありき」。能因本により改む。

（『新大系』本文／脚注）

×説経の始めの方ぐらいをあちこち聞きまわる人はなかった。／能本「されど、この草子など出で来はじめつ方はかちありきする人はなかりき」。底本通り仮に本文を定める。「はじめつ方ばかり」は「説経のはじめの方ぐらい」と見るが、「ありき」は不審。仮に、「あちこちを歩きまわる・あれこれの説経をのぞいてまわる」の意に解した。後文との続きから女性についてのみ言ったような文脈に見えるが、必ずしもそうではなかろう。能本に添って解けば「といって、昔は、徒歩で来る女性はなかった」となるが、やや無理か。（『新全集』現代語訳／頭注）

×はじめつかたは、かち（り）ありきする人はなかりき。／私が初めて聴聞に行った頃は、聴聞に徒歩であちこち行く人はなかった。／▼かちありき　底本「かりありき」。能本による。（『全訳注』本文／現代語訳／語釈）

・今昔対比の一例。

（『新編』脚注）

【批評】

三巻本諸注を大別すると、底本そのままに限定の副助詞「ばかり」＋動詞「ありき」と解く立場と、能因本本文を

採って係助詞「は」＋名詞「かちありき」と解く立場に二分されているとみてよい。ところが、前者の場合は、「はじめつ方ばかり」の意味をたとえどのように理解しようとも、それが漠然とした「ありき」の語に繋がっていく不連絡をどうにも解消しがたいと思われるし、後者の場合は、「はじめつ方は」の部分こそ安定するものの、つづく「かちありき」なる奇妙な語の存在については、とうてい認めがたいという難点を抱えているのである。

要するに、本節問題の傍線部分は、現存三巻本・能因本どちらの本文に依拠しても所詮解読不能なのであって、誤写の潜在する箇所だと判断して考察を進めていくよりほかに手がないわけだ。

【本文改訂案】

さて、石垣佳奈子「三巻本『枕草子』「説経の講師は」の〈今〉と〈昔〉」（「物語研究」第十七号、平二九・三）は、当該不審本文について次のように述べていて注目される。

このように、三巻本の「はかり」に対応する部分、能因本の「はかち」は、いずれもこのままの本文では読めないものであり、現存の三巻本、能因本の本文は、いずれも書写過程での写し間違いによって生じたものだと考えるしかないと考えられる。そこで、問題になっている箇所の「り（字母「利」）」と「ち（字母「知」）」と字形が似る字を挙げると、「く」を挙げることができる。「く」の字母としてよく使われる「久」「具」「九」のいずれにおいても、「り」「ち」と形が近い。現存の三巻本にも能因本にもない本文ではあるが、ここは、「はじめつ方は、かく歩きする人はなかりき」という本文が『枕草子』が成立した当時の形であり、現存の三巻本・能因本の本文はそこからの誤写によって生じた本文だと推定する。女性の聴聞について、現在は身分の低い者までが出かけて

いるが、説経聴聞が一般化しはじめた頃は、女性で現在のように頻繁に出歩く人はいなかった、と述べた部分だと解釈するのが適当だと考えられる。

一理ある推定だが、ここで求められるのは、「かく」→「ありきする」という連用修飾ではなく、「かかる」→「ありき」という連体修飾関係の方なのではないかと思う。誤写の蓋然性からしても、「ゝる（留）」から「り（利）」または「ち（知）」への転化を想定するのが最善だろう。よって、本稿の提唱する改訂本文は、

◎はじめつ方は、か**かる**ありきする人はなかりき。

〔（女性にまで説教の聴聞が広がりはじめた）初期の時分には、このような外出を（気安く）する（女の）人はいなかった。〕

となる。以下に、『源氏物語』中から参考例を拾い出しておく。

・なほかかる歩きは軽々しく危かりけりと、いよいよ思し懲りぬべし

（空蟬巻／新編日本古典文学全集①・一二八頁九行～一〇行）

・かの尼君などの聞かむに、おどろおどろしく言ふな。かかる歩きゆるさぬ人なり

（夕顔巻／同・一六八頁八行～一〇行）

・あはれなる人を見つるかな、かかれば、このすき者どもは、かかる歩きをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり

（若紫巻／同・二〇九頁一〇行～一二行）

・かかる歩きなども、をさをさならひたまはぬ心地に、心細くをかしく思されけり。

（橋姫巻／同⑤・一三六頁六行～七行）

・すこしも身のことを思ひ憚らむ人の、かかる歩きは思ひたちなむや。（浮舟巻／同⑥・一二七頁一〇行～一一行）

【参考】

〔三巻本本文〕かりありきする（陽中本勧弥刈徳日内早宇古）―かりありきつる（前河）

〔能因本本文〕はしめつ方はかちありきする人はなかりき（学）はじめつかたはかちありきする人はなかりき（富）

六

【本文】「ふと心おとりとかするものは」の段

ふと心おとりとかするものは　男も女も文字いやしう使ひたるこそよろづの事よりまさりてわろけれ。ただ文字一つに、あやしう、あてにもいやしうもなるは、いかなるにかあらむ。（第百八十六段・三二四頁四行～八行）

【三巻本諸注の解釈】

×ふと心おとりとかするものは／一瞬、幻滅に似た感じがするものは／相手を軽蔑したくなるもの。案外だといつた感じがして失望するもの。「とか」は、といつたような意。流布本「わろきものは」となつている。

（『評釈』本文／通釋／頭註）

×ふと心おとりとかするものは／急に幻滅を感じるものは。この一句文脈の上から妥当を欠く。
（『大系』本文／頭注）
×ふと心おとりとかするものは／ふいと幻滅とかを感ずるものは／この一句不審。三巻本以外の諸本にはない。
「心おとり」は予想より劣つて感じられること。「心まさり」の対。（『全講』本文／文意／釈義）
×ふと心おとりとかするものは／急に幻滅を感じたりするものは（『旺文社文庫』本文／現代語訳）
×ふと心劣りとかするものは／途端に、幻滅とかを感ずるものは（『角川文庫』本文／現代語訳）
×ふと心おとりとかするものは／とたんに幻滅とかそんなものを感じるのは（『解環』本文／口訳）
×ふと心劣りとかするものは／東本「ふと心劣りするものは」、能本、前本「男も女も、よろづの事まさりてわろきもの、言葉の文字あやしく（前本〈いやしう〉）使ひたるこそあれ」。（『和泉古典叢書』本文／頭注）
×ふと心おとりとかするものは／急にがっかりさせられるもの。（『新大系』脚注）
×急に幻滅とかを感じるものは／とっさに、相手が思っていたより下だ、と劣ったものに見えるもの。
（『新全集』現代語訳／頭注）
×〔ふと〕心劣り〔とか〕するものは／底本ならびに内閣文庫本にはないが「ふと」と「とか」を一類本により補う。／急に、幻滅といった感じがするのは（『全訳注』本文／語釈／現代語訳）
×ふと心劣りとかするものは（『新編』本文）

【批評】

傍線部「とか」は格助詞「と」と係助詞「か」とからなる連語であり、平安朝当時は、伝聞表現の形成に預かるか、「～トイウツモリダロウカ」「～トイウコトダロウカ」等の意を表した。したがって、これがサ変動詞「す」に接続することはまずもって考えがたい。その理由をここであだ「とか」こうだ「とか」あれこれ述べたてる必要すらないであろう。当該文脈の「とか」について文法的に合理的説明を施すこと自体どう足掻いてみても不可能なわけだから。

にもかかわらず、第一類の最善本とされる陽明文庫本が同本文を有することも手伝って、諸注の多くが、この「とか」を「に似た感じ」（『評釈』）「といった感じ」（『全訳注』）「たり」（『旺文社文庫』）「とかそんなもの」（『解環』）、さらには、そのまんま「とか」（『全講』『角川文庫』『新全集』）などと訳して、何「とか」その機微を伝えようと腐心している（『全訳注』に至っては、二類本の底本＝弥富本にないこの語をわざわざ「一類本により補う」措置を講じている）。しかし、こうした努力もすべてが徒労だったといわねばならないのである。

実のところ、三巻本内でも「とか」のない伝本の方がむしろ多く（【参考】欄参照）、二重傍線を付した部分からうかがえるように『和泉古典叢書』のみは、底本＝陽明文庫本の本文を疑っているように思われる。要するに、疑惑の「とか」はもともとなかった不純本文とみるべきであったのだ。

【本文改訂案】

問題の「とか（可）」は直前の「とり（利）」から派生した衍字と判断して、これを削除するのが正しい。したがって、本段冒頭本文は、次のように改訂されることになる。

◎ふと心おとりするものは

〔途端に幻滅するものは〕

本段の本文の様相は他の系統と比較して大きく異なっており、三巻本本文の本来性が疑われもするところだが、それはそれとして、三巻本固有の問題としては、右の解決案がベストといえよう。

【参考】

〔三巻本本文〕ふと心おとりとかするものは（陽勧）ふと心おとりとかする物は（明宮高）ふと心をとりとかする物は（富本中）―ふと心おとりするものは（徳鳥）ふとこゝろをとりするものは（日）ふと心をとりするものは（早宇古河岸）ふと心をとりする物は（前）ふと心おとりする物は（伊静）心おとりするものは（弥内）

〔能因本本文〕ナシ

七

【本文】「見物は」の段

行幸はめでたきものの、君達車などの好ましう乗りこぼれて、上下走らせなどするがなきぞ、くちをしき。さや

うなる車のおしわけて立ちなどするこそ、心ときめきはすれ。（第二百六段・三四二頁一四行～三四三頁一行）

【三巻本諸注の解釈】

×君達車などの／君達の乗つた車などが（『評釈』本文／通釈）

×君達、車などの／君達が、車など（中略）一説に「君達車」を一語とみる。（『大系』本文／頭注）

×君達、車などの／君達が、車など／一説に「君達車……」とし、疑問もあるが、一応このように解しておく。（『全講』本文／文意／釈義）

×君達車などの／身分家がらのすぐれた貴公子の乗った車などが（『旺文社文庫』本文／現代語訳）

×君達、車などの／身分の高い若殿ばらが、車など（『角川文庫』本文／現代語訳）

×きむだちぐるまなどの／若い貴公子の車なんかが（『解環』本文／口訳）

×君達、車などの（『和泉古典叢書』本文）

×君達車などの／君達の乗った車、の意であろう。（『新大系』本文／脚注）

×君達車などが／仮に「君達車」を一語と見たが、「君達、車などの好ましう、乗りこぼれて」と見ることも可能。ただし「の」が落ち着かない。（『新全集』現代語訳／頭注）

×君達、車などの／身分の高い君達が、牛車などに（『全訳注』本文／現代語訳）

×君達車などの（『新編』本文）

【批評】

行幸こそが当代最高の「見物」だとする清少納言が、その唯一残念な点を記した部分。傍線部に関する三巻本諸注の見解は、「君達車」を一語とみるか否かで真っ二つに分かれている。だが、「女房車」はあっても「君達車」なることばがないのは明らか。となれば、「君達、車などの」と解くほかないのだけれども、今度は「の」が落ち着かない」（『新全集』）という問題が生じることになる。この「の（乃）」は、「に（爾）」の誤写とでもみないかぎり、どうにも説明しがたいお荷物になってしまうわけだ。

結局のところ、これまでの両説はどちらも支持できるものではなく、ここはもっと別の発想に基づいて〝正解〟を導き出す必要のある箇所といえるのである。

【本文改訂案】

そこで提案したいのは、「くるまなとの」または「車なとの」は、「の」と「くるまなと」／「車なと」が転倒した転化本文ではないかという考えで、もとは、

◎君達**の、車など**

〔良家の坊ちゃんたちが、牛車なんかを〕

と書かれていたとする見方だ。格助詞「の」は、「君達」が以下の主語であることを示すために不可欠な要素となる。「君達、車などの」説に立つ注釈書に蔑ろにされてきた「の」の文字も、これでようやく浮かばれることになるのではなかろうか。

【参考】

〔三巻本本文〕異同ナシ

〔能因本本文〕ナシ

八

【本文】「五月ばかりなどに山里にありく」の段

左右にある垣にあるものの枝などの車の屋形などにさし入るを、いそぎとらへて折らむとするほどに、ふと過ぎてはづれたるこそ、いとくちをしけれ。蓬の、車に押しひしがれたりけるが、輪の廻りたるに、近ううちかかりたるもをかし。

（第二百七段・三四六頁一二行～三四七頁一行）

【三巻本諸注の解釈】

×近ううちかへりたるも／鼻先で匂ってきたのも／▼うちかへり　匂いが漂う。（『評釈』本文／通釋／頭註）

△近ううちかかりたるも／顔の近くにおったのもいい。「かかりたる」は「かかへたる」の誤りか。／「かゝへ」は〔四四〕にも用例があり、香がこもってそれがあたりに漂う意である。三巻本の「かゝりたる」によれば、つぶれたよもぎが車の輪に引っ掛っている意に解されるが、それでは「をかし」がはっきりしない。なお、「かゝへ」を

「かゝり」に誤ったと推定される例は〔一九八〕にも見える。

△近ううちかかりたるも／この本文によると、蓬の押しつぶされたのが、すぐそばに引掛っているの意となるが、なぜそれが「をかし」なのか不審。前田本・堺本に「かゝへたる」とあるのが正しいのではあるまいか。「かゝへ」は、香がこもつて、それがぷんと匂い漂うの意。「汗の香」（四二段）参照。なお、「かかり」が「かかへ」の誤りと解される例は「秋吹く風」（一九〇段の二）にも見える。（『全講』本文／釈義）

△近ううちかかりたるも／ついそばまでにおって来たのも／前田本「近うかゝへたるも」、堺本「ふとかかへたるも」とある。能因本の一本には「近うかけたるもかのかゝくたるも」（くはへの誤りか）とある。「かゝへ」は本文によると、匂いをふくみ持つ義で、近くかおって来たの意。「かかり」は「かかへ」の誤りか。（ママ）

（『旺文社文庫』本文／現代語訳／脚注）

○近ううちかかへたるも／近くぷんとかおったのも／三巻本「うちかかりたるも」。今訂す。能因本（高野本）「近うかけたるもかのかゝへたるも」、前田本「近うかゝへたるも」、堺本「ふとかゝへたるも」。

（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注）

×ちかううちかゝりたるも／簾近くにばさっと当たるのも

（『解環』本文／口訳）

・近ううちかかりたるも／前本「近うかかへたるも」。

（『和泉古典叢書』本文／頭注）

○ちかううちかゝへたるも／底本「うちかゝりたるも」。能因本・前田本などに「かゝへ」とするのにより改む。「かかへ」は香の漂う様を言う言葉。押しつぶされた蓬が車輪にくっついて上の方へ来て、近々と匂って来る有様の描写。

（『新大系』本文／脚注）

×近くにひっかかっているのも／不審。仮に自分の近くに蓬のひっかかったのがまわって来る、の意と見る。「うちかかり」のままでは「香をふくみ持つ」意にはとれまい。能本「輪の舞ひ立ちたるに、近ううちかかりたるもかかへたるもいとをかし」。（『新全集』現代語訳／頭注）

×近ううちかゝりたるも／すぐ近くまでと当た（ってその香りがぷんと匂ってく）るのも／ここは、車輪に踏まれた蓬の葉がまわり上がってきて作者の座る屋形あたりでさっと匂ったと解すべき文脈であろう。今は底本通り「うちかゝり」ととり、「をかし」の評語は、その時に蓬の香りが顔近くにぷんとにおったからだと考えておく。（『全訳注』本文／現代語訳／語釈）

×近ううちかかりたるも／車輪の回転と共に蓬が持ち上げられる。座席の近くに来てさっと匂う（学術文）。（『新編』本文／脚注）

【批評】

三巻本の本文を忠実に解釈するならば、牛車の車輪に押し潰され付着した蓬が「簾近くにばさっと当たるのも」（『解環』）、「近くにひっかかっているのも」（『新全集』）、あるいは、その汁が自分の近辺に飛び散ってくるのも、などとなるのだろうが、いずれも不適切。だからといって、現本文を「すぐ近くまでと当た（ってその香りがぷんと匂ってく）るのも」（『全訳注』）などと都合よく訳すのは明らかに無理である。

そうであってみれば、「かかり」は「かかへ」の誤写かと疑う立場（『大系』『全講』『旺文社文庫』）が生じ、他系統本文を採って「かかへ」への改訂を断行する注釈書（『角川文庫』『新大系』）が出て来るのも、むしろ当然のなりゆき

だったと頷けよう。本稿の立場も、他系統本文に拠る校訂という点にこだわらなければ、結果的にこれらに同じなのである。

【本文改訂案】

上に述べたような理由から、現本文「かかり」の「り（利）」は「へ（部）」の写し誤りと裁定し、傍線部本文はやはり、

◎近ううちかかへたるも

〔近くに（蓬の香が）漂っているのも〕

に改められねばならない。この形であってこそ、つづく「いみじう暑きころ」の段の末尾、

いと暗う、闇なるに、さきにともしたる松の煙の香の、車の内にかかへたるもをかし。

（第二百八段・三四七頁一一行～一三行）

ともうまく照応することになるのである。

ところで、「漂う」「匂う」の意を表す動詞「かかふ」が用いられている以上、その前後いずれかに名詞「香」の存在が望まれるという問題が依然として残るのではないかと思う。そうだとすれば、「蓬の、車に押しひしがれたるが」の下には、もと「の」（「か」＋「の」＝「香の」）、「ゝの」（「か」＋「ゝの」＝「が香の」）などの文字があった可能性も浮上してこよう。今はそこまで立ち入る用意はないものの、なお考えたいところだ。

【参考】

〔三巻本本文〕異同ナシ

〔能因本本文〕ちかうかけたるもかのかゝくたるも（学）ナシ（富）

九

【本文】「三月ばかり物忌しにとて」の段

そのころ、また同じ物忌しに、さやうの所に出で来るに、二日といふ日の昼つ方、いとつれづれまさりて、ただ今もまゐりぬべき心地するほどにしも、仰せ言のあれば、いとうれしくて見る。浅緑の紙に、宰相の君いとをかしげに書いたまへり。

「いかにして過ぎにし方を過ぐしけむ暮らしわづらふ昨日今日かな

となむ。わたくしには、今日しも千歳の心地するに、暁にはとく」とあり。この君ののたまひたらむだにをかしかべきに、まして仰せ言のさまは、おろかならぬ心地すれば、

「雲の上も暮らしかねける春の日を所からともながめつるかな

わたくしには、今宵のほども少将にやなりはべらむとすらむ」とて、暁にまゐりたれば、「昨日の返し『かねける』、いとにくし。いみじうそしりき」と仰せらるる、いとわびし。まことにさる事なり。

（第二百八十二段・四三五頁七行～四三六頁七行）

【三巻本諸注の解釈】

×少将にやなり侍らむとすらむ。／あの深草の少将になつてしまうのではございますまいか。／深草の少将。百夜通つたら逢おうという女のもとに、九十九夜通い、あと一夜を待ち切れずに死んだといわれる。その少将のように時分も今夜一夜が耐えられず、焦れ死にしそうだという意味。（『評釈』本文／通釋／頭註）

×少将にやなり侍らんとすらん／今夜のうちにも例の少将になってしまうかもしれません。諸注深草少将の伝説を指摘する。なお研究を要する。（『大系』本文／頭注）

×少将にやなり侍らむとすらむ／深草の少将になつてしまいそうでございます。／諸註に、百夜通つたなら逢おうといつた女のもとに、九十九夜通い続け、残る一夜を待ちきれずに死んだという深草の少将の伝説によるかとする。なお考証を要する。（『全講』本文／文意／釈義）

×少将にやなり侍らむとすらむ／待ちきれずに焦がれ死にをしそうです／小野小町のもとへ百夜通えといわれて九十九夜まで通い、いま一夜を待ちあえずして死んだ「深草の少将の百夜通いの伝説」（清輔『奥義抄』その他に見える）によったのであろうか。早く参上したくて、今夜一夜を待つにしんぼうできず、あの少将のように死んでしまいそうだ、の意。（『旺文社文庫』本文／現代語訳／脚注）

×少将にやなりはべらむとすらむ／あの少将のようになってしまうのではないかという気がいたします／未詳。／『春曙抄』に「百夜かよへといひし女のもとへ九十九夜行きて、今一夜を待ちあへずして失せたりし深草の少将の

世語りにて言へる詞にや。清少も早く参りたき心焦られに、今夜一夜を待ちかねてうせやし侍らんとなるべし」とある。古いところは謡曲「通小町」であろうが、後世の虚構であるから、にわかに拠りがたい説である。深草の少将からの連想では、『大和物語』、清水で小野小町と歌を詠みかわして姿をくらました遍昭（良少将）の話が思い浮ぶ。同じ『大和物語』に、五条の后からの使いに会った話もあるけれども、ここにしっくりはしないようである。なお考うべきである。

（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注／補注）

×少将にやなり侍らむとすらむ／（私は）何とかの少将になってしまうのではございませんかしら

（『解環』本文／口訳）

×少將にやなり侍らんとすらん／不明。『春曙抄』は、深草の少将の百夜通いの説話により、今日で宮中に帰ることができるというのに、それを待ちかねて、今宵のうちに死ぬのではないか、と思うほどだ、の意とする。宰相の「千年」に、「百夜」で応じた。

（『和泉古典叢書』本文／頭注）

・少将にやなり侍らんとすらん／私は今宵のうちに少将になりそうです。「少将」は、小野小町に百夜通ったという深草少将を、清少納言の当時に既にその話があったと判断すべき証拠はないけれども、擬するしかないであろう。宰相の君の「暁には」に対して「今宵」ということで、私は暁まで待てそうにもありません、の意を利かせたことは確実だろうから、同様に宰相の君の「千年」に対して、私は「百夜」が限度です、といった意を利かせた言葉の上での応酬、と見ておく。

（『新大系』本文／脚注）

×ひょっとしたら『少将』になろうか、というところでございます／不審。一説に「百夜かよへと言ひし女のもとへ九十九夜行きて、今一夜を待ちあへずして失せたりし深草の少将の世語りにて言へる詞にや。清少も早く参り

たき心焦られに、今夜一夜を待ちかねて失せやし侍らむとなるべし」（春曙抄）というが、この説話の発生は後世らしくて、にはかには従いかねる。（『新全集』現代語訳／頭注）

×少将にやな（り）侍らんとすらん／あの少将のようになってしまうのではないかという気がいたします。／▼少将　未詳。『春曙抄』は、深草の少将の百夜通いの説話を挙げているが、なお後考に俟ちたい。（『全訳注』本文／現代語訳／語釈）

×少将にやなりはべらむとすらむ。／一説、深草の少将の百夜通い伝承に拠り「清少も早く参りたき心いられに、今夜一夜を待ちかねて失せやし侍らんとなるべし」（春）。『奥義抄』以下に見えるが成立時期未詳。（『新編』本文／脚注）

【批評】

多くの注釈書が『春曙抄』説を紹介するが、二重傍線部からもはっきりとわかるように、これが万やむをえぬ応急措置であることは明らか。もとより採れない説だが、その場合、本文はせめて「深草の少将」となければならない。宰相の君の「千歳（千年）」に対する「百夜」の応酬を読み取る見解（『和泉古典叢書』『新大系』）もあるけれど、もしそうであるならば、今度は本文に「百夜」の語が明示されていることが必要条件となるはずであり、それがない以上とうてい顧慮するに足る説とはいえない。

清少納言の私信部分を現本文のまま強いて解釈するなら、「今夜のうちにも、（私は清少納言改め清）少将になろうとしているのでございましょうか」、あるいは、「今夜の間にも、（私は）少将（という職階）に就こうとしているので

ございましょうか」とでもなるのだろうが、いずれにせよまったくもって意味不明というほかなかろう。よって、ここも現本文の信憑性を根底から疑ってみるべき不審箇所と判定されるわけである。

【本文改訂案】

実のところ、ここは難問中の難問というべきで、正直なところいまだ明解を得ていない。けれども、こうして取り上げた以上、暫定案くらいは提示しておかねばならないだろう。

一つだけ断言できるのは、現在「少将」とある部分がもとはそうではなかった、つまり、人物ないし官職を表す名詞ではなかったということである。そうではなく、清少納言の一刻も早く中宮のもとに参上したいが今夜が明けるまではそれがままならないもどかしさの表現であったはずなのだ。

そこで、一案。それは、①「中〳〵」→②「少〳〵」→③「少将」という誤写過程を想定し、「少将」は元来「なかなか」だったのではないかとする考え方であって、これに従えば〝復元〟本文は次のようになる。

◎**なかなか**にやなりはべらむとすらむ

〔そわそわした状態に陥るのでございましょうか〕

①から②への転化は漢字「中」と「少」のありふれた交替であり認められてよいだろう。ところが、②から③へのそれについては、「少将」の字音が「セウシヤウ」であるため厳密には成り立たないといわねばなるまい。しかし、今は「少〳〵」が「少将」に誤って書写されることも現実にはありえたと考え、この点はさして問題視するにあたらないのではないか。

形容動詞「なかなかなり」の連用形である「なかなかに」は、ここでは「どっちつかずに・中途半端に・かえって」ほどの意になり、先に述べた清少納言の葛藤を表現した語とひとまず判断しておくことにする。それこそ「なかなかなる」わざかとも思うが、左に『源氏物語』から任意の用例を抽出してこの場は終えよう。

・まして見たてまつるにつけても、つらかりける御契りのさすがに浅からぬを思ふに、なかなかにて慰めがたき気色なれば、こしらへかねたまふ。（薄雲巻／新編日本古典文学全集②・四六五頁一五行～四六六頁三行）

・「今さらにいかならむ世かわか竹のおひはじめけむ根をばたづねん
なかなかにこそはべらめ」と聞こえたまふを、いとあはれと思しけり。（胡蝶巻／同③・一八三頁二行～五行）

・立ちながら、はた、なかなかに飽かず思ひたまへらるべうてなん、日ごろ過ぐしはべりける。（柏木巻／同④・三二九頁七行～八行）

・ほど経にけるが思ひいれられたまはぬにしもあらぬに、なかなかにてうち過ぎたまひぬるを、つらくも口惜しくも思ほゆるに、いとどものあはれなり。（総角巻／同⑤二九九頁一〇行～一二行）

【参考】

〔三巻本本文〕異同ナシ

〔能因本本文〕少将にやなり侍らんすらむ（学）少将にや成侍らんすらん（富）